

私を追い出すのは
いいですけど、この家の
薬作ったの全部私ですよ? 2

火野村志紀

Shiki Himemura

RB

レジーナ文庫



ドリス

サイラスの妹で、
兄とは正反対の
おっとりとした
性格。

サイラス

オルンテッド共和国、
アイロニア公爵家の
次期当主。
鍛冶神様の『創造』の
加護を持つ。

ティア

薬師を
目指している
レイフェルの
弟子。

ハルバート

アレックスの
叔父で、
彼の護衛を
している。

ダチュラ

レイフェルの店に
訪れた謎の旅商人。
実は、彼女の正体
は——!?

ディアーナ

強気で美人な
侯爵令嬢。社交界の
化粧品ブームの
火付け役。

レイフェル

元・カラスター
男爵家の長女。
辺境のヘルバ村で薬屋を
始めてから、
秘められた薬師の
才能がどんどん
開花して——!?

アレックス

大国アスクラン王国の
第三王子&薬師で、
凄腕薬師協会
『蛇の集い』の支部長。
通称、薬学王子。



登場人物紹介

目次

私を追い出すのはいいですけど、
この家の薬作ったの全部私ですよ？ 2

そのほかの話 籠かごに授ける

書き下ろし番外編
二人目の弟子？

私を追い出すのはいいですけど、

この家の薬作ったの全部私ですよ？ 2

始まりの話 私の日常

本日も朝早くから私——レイフェルの仕事は始まる。

空がまだ薄暗い中、屋敷の近くの森へ足を運び、そこで薬の材料となる薬草を摘み取っていく。明け方の短い時間だけ花を咲かせる薬草も絶対に忘れないように摘む。開花した状態のものを使うと、良質な薬が作れるのだ。

籠の中が薬草でいっぱいになったら屋敷に帰る。そのころには東の空が太陽の光に焼かれて赤く染まり始めていた。

私の一番好きな景色。見ていると、今日も一日頑張ろうという気持ちになる。

「……ただいま戻りました」

私が薬草摘みから戻ってきてても、誰も出迎えてはくれない。そのまま広間へ向かうと、そこでは私の元婚約者——アロンと妹——ルージェがこんな時間からワインを飲んでいた。

「うーん、やっぱりこれは素晴らしい品種だな。風味豊かで濃厚な味わいだ」

「そうですね、アロン様。毎日これを飲み続けていたいですわ」

「私もだよ、ルージェ。だが、これは少し値が張るんだ。毎日というわけには……」

「あら、そんなことでしたら心配いりませんわよ。ワイン代ならお姉様が薬を売って稼げばいいのですから！」

ルージェはそう言いながら、部屋の前で佇んでいる私へ視線を向けた。アロンもその考えに賛同するように頷く。

「そうだな。そのくらいはしてもらわないと困る。何せ我がレオル伯爵家の経済状況は、とても苦しいことになっているのだから」

「……そうなんですか？」

私は軽い苛立ちを覚えつつ、そう尋ねた。

これだけ立派な屋敷の一室で、高級ワインに舌鼓を打っている様子からは、とてもそんなふうには見えないけれど。

するとアロンは、それはもう深い溜め息をついた。

「ああ。だから私たちは、今もこうして必死に働いて金を稼いでいるんだ……ここだなあ！」

「へっ?」

その言葉を聞いた瞬間、朝日が差し込む煌びやかな広間から、周囲の景色がガラリと変化した。

そこはなんと薄暗い炭鉱で……たんこ……炭鉱……!? 私、なんでこんなところにいるの!?

「いいか、レイフェル! 毎日毎日俺たちは炭鉱で労働させられているんだ!」

「甘いお菓子も、ジューシーなお肉も食べられずにいるのですわ! 過酷ですわ!」

背後から聞こえた怒りの叫びに振り向けば、薄汚れた作業着姿で、つるはしを握り締めるふたりの姿があった。

……なんかやけに似合ってるな。しかもルージェは先ほどもまでの姿とは打って変わり、いつの間にか太っていて、作業着がピッチピチの状態。アロンふたり分くらいの体積を有している。

元婚約者と妹の変わり果てた姿に衝撃を覚えていると、なんとルージェがつるはしを振り上げながら、こっちに向かつて走ってきた!

「お姉様の頭をかち割って、シャバの空気を吸いに行きますわー!」

「ギヤアアアアッ!」

命の危機を察して私も走り出す。だけどルージェとの距離は開くどころか、どんどん縮まっていく。た、体型のわりに動きが速いだと……!?

このままでは殺^やられる。絶体絶命のピンチに半泣きになっていると、毒々しい色をしたキノコが地面から生^はえているのを見つけた。

それを急いでもぎ取り、ルージェへ思い切り投げつける! 悪霊退散!

「ヒッ……キヤアアアア……!」

するとルージェは苦悶^{くもん}の悲鳴を上げると同時に、その大きな体から目映い光を放った。周囲を包み込む白い光に私は耐え切れず、思わず目を瞑ってしまった……

「——フェルさん……レイフェルさん!」

ん? 誰だろ、この声。どこかで聞いたことがあるような。

「んん……?」

目を開くと、そこにいたのは私そっくりの顔立ちをした女の子。私の頼れる弟子のティアだ。

「ティ、ティア! 早くキノコを拾って! またルージェが復活するかもしれない!」

「な、なんの話ですか!？」

「なんの話って……あ、あれ?」

見回してみると、周りの景色は炭鉱から薬屋の作業場が変わっていた。

……な、なんだ、夢かあ。どうやら薬作りの最中に、うたた寝をしてしまっていたらしい。

「大丈夫でしたか? なんかすんごくうなされてましたけど」

「う、うん……起こしてくれてありがとう」

妹に頭をかち割られそうになる夢を見たせいだと思う。怖かった……

「じゃあ、レイフェルさんも起きたことですし、これ煮込んじやいますか」

そう言ってティアが背負い籠かごをテーブルにドンツと置く。

中に入っていたのは、傘から軸まで虹色のキノコ。どこに出しても恥ずかしくない立派な毒キノコで、そのまま食べると強い幻覚症状に襲われる。

多分これがさつき見た悪夢の原因だろう。うたた寝する前に、気持ち悪いなあって思いながら眺めていたのだ。

そういえば、近所のおじいさんがこれを誤って食べたせいで、自分を犬だと思い込み、お隣さんの犬小屋を占拠した事件もあったなあ……

そんなことを思い出しながら、お湯を沸かした鍋にキノコを入れる。

そしてレードルでぐるぐる掻き混ぜると、次第にお湯の色が虹色に変化していく。

その代わり、キノコは無色透明になっていた。この状態になると、毒の成分が変化して薬の材料として使えるようになるんだよね。

「よし、もういいかな……」

キノコを鍋から出したらちよつとひと休み。ずっと鍋を掻き回していたから疲れちゃった。一旦休憩。

椅子に腰かけて、テーブルに置いていた一通の手紙を手取る。今朝届いたんだけど、一日ずつと開けるのを我慢していたのだ。その封印をついに……解くっ!

お洒落な花柄の封筒の中には、香り付きの便箋びんせん。爽やかな柑橘系の香りに頬が綻ぶ。

手紙の主は優れた薬師であり、アスクラン王国の第三王子でもあり、そして私の恋人のアルさん——アレックス・リレス・アスクレイドルだ。アスクラン薬師協会——通称『蛇へびの集い』の支部長としても働いている彼は、普段はこのヘルバ村の近くの森で研究に勤しんでいる。

しかし、現在は祖国に戻っていた。なぜならアスクラン王国の建国記念日が近く、その日は大きな式典が執り行われるからだ。

アルさんは式典の準備で大忙しみたい。

王子様だからねえ………と思いつながら手紙を読み進めていると、なんとお兄さんたちのスピーチを一緒に考えてあげているらしい。お兄さんたちよ、そのくらい自分で考えろ………！

「ハルバートさんは元気にしてますか？」

「うーん、こっちはこっちで大変そう………」

ティアが山賊系侯爵子息について聞いてきたので、乾いた笑いとともに答える。

現在ハルバートさんは王妃様の買い物に、荷物係として付き合われているらしい。

どんなにムキムキマツチョでも、お姉さんの圧には勝てなかったか……

アルさんもハルバートさんも大変そう。

家族に振り回される苦労は私もよく理解している。分かる、分かるよ、ふたりの気持ち………！

「……よし！」

私は本棚から薬草料理の本を引き抜いた。

「レイフェルさん？」

「ふたりとも疲れて帰ってくると思うから、美味おいしくて栄養満点のごはんを作ってあげ

ようかなって」

「あー、いいですね。それ！」

うーん、がつつりこつてりメニューじゃなくて、胃腸に優しいスープのほうがいいよね。あとで村の奥さんたちにも相談してみよう。

そう計画を立てていると、ティアが思い出したように口を開いた。

「そういえば、明日でしたっけ？ 旅商人が来るのって」

「あ、うん。確か昼前に来るって手紙に書いてあったと思う」

各地をさすらう旅商人。彼らが扱う商品には、当然医薬品も含まれている。そして、その仕入れ先として私の店を選んでもくれる人は結構多い。それはうれしいし、ありがたいんだけど……

「こないだみたいな人じゃないといいですねー……」

「う、うん……」

三週間前にやってきた旅商人はヤバかった。

私の顔を見るなり、「会いたかったデース！」と抱きついてきたのだ。薬神やくがみさま様の加護を持つ私のファンで、はるばる異国から会いに来たそうなの。

何してんだこの変態野郎！ とすぐに投げ飛ばしたものの、「ありがとうございマー

ス！」となぜか礼を言われて怖かった。どうやらそういう趣味の持ち主だったらしい。あれが軽いトラウマになっていて、当分の間ヘルバ村の人以外は来店お断りにしようかな……と考えていたら、その前に旅商人から手紙が届いちゃったんだよね。あまり気が乗らないけれど、引き受けるしかないか……

「でも心配しないでください、レイフェルさん」

「ティア……」

「今度妙な輩^{やから}が来たら、私が仕留めますんで！」

「えっ、しと……?」

満面の笑みを浮かべながら物騒なことを言うティアが怖い。私の店で血腥^{ぐうけつ}いことなんて起こってほしくないんだけど……

そんなことを考えながら、私は薬草料理の本を読み始めたのだった。

第一話 異国からの来訪者

翌朝。私はいつもよりも早い時間に起きた。もしかしたら旅商人が約束の時間より早く来るかもしれないからね。

朝ごはんはミルク粥。私は甘いのが大好きだから、砂糖多めでドライフルーツもパラリと。うんうん、優しいお味。ドライフルーツの酸味がいいアクセントになっている。食べ終わったら新聞にざっと目を通す。国一番の規模を誇るパン工場が、今日から稼働するとか。漁師たちが害魚の大量発生に頭を悩ませているとか。

新聞の片隅には、リーデイン王国の王女様の失踪事件についての記事もある。

……リーデイン王国。その国名を聞くと、ひとりの薬師を思い出す。私の元婚約者のアーロンが経営していた薬屋に勤めていたエヴァルトだ。

私を養子として引き取ってくれたノートレイ伯爵夫人の中毒事件がきっかけで、彼の悪行が次々と発覚したのだけれど、元はリーデイン王国の王宮医官だったみたい。これにはあちらの国も大騒ぎで、エヴァルトの関係者もすぐに逮捕されたらしい。

今とはとにかく、王女様が無事に見つかればいいけれど。世の中大変だなあなんて思っている、店のほうから何やら物音が聞こえてきた。

ティア……は違うよね。まだ店に来る時間じゃない。

もしかして、またドアの鍵を掛け忘れちゃっていたのかも。前は店内がチビツ子たちの遊び場と化していたんだよね。

人前に出られるように急いで身なりを整え、店の様子を見に行く。

「すみません、まだ開店時間じゃないん……で……」

何やら戸棚の中を物色している不審者と目が合った。店のドアは半開きになっている。なんで布を巻きつけて顔を隠しているんですかね？

なんで背負っているリュックサックの中に、うちの薬が大量に詰め込まれているんですか？

なんで片手にナイフを持っているんですか？

「どつ、泥棒だ……っ!!」

びっくりしすぎて、頭の中で思い浮かんだ言葉がそのまま口から飛び出していた。それが大音量で。

「お前がこの店の店主だな!」

泥棒は私へと駆け寄り、ナイフの切っ先を突きつけてきた。

「ギャー!」

「静かにしろ! それと金と貴重品を出せ!」

「う、うちにお金なんてそんなにありませんし、貴重品ならあなたがもうリュックに詰め込んでます……!」

薬師にとって、自分の作った薬は大切なもの。

パンパンになっているリュックサックを指差しながら答えると、泥棒が「ああっ!」と声を荒らげた。

「なんだと? こんなもん、ただの薬じゃねえか! 俺が言ってるのは宝石とか金目のもんだよ!」

そんなことを言うならどうして薬を盗もうとしてんだ!

ん? いや、待てよ。宝石!?

ノートレイ伯爵夫人から譲り受けたサファイアのペンダント。今は寝室の引き出しにしまっているけれど、見つかったら絶対に盗られてしまう!

焦りながら、店内の壁に立てかけている箒ほうきと視線を向ける。こうなったら、あれで泥棒と戦うしかない。

私の脳内で、戦いのゴングが鳴ったときだった。パンツと勢いよくドアが開き、店内に飛び込んだきた何者かが泥棒に回し蹴りを喰らわせた。

「ぐほおっ!」

不意打ちを喰らって床に倒れ込む泥棒。

その直後、立てかけてあった箒^{ほうき}がなぜか私目がけて飛んできた。

驚いてキョロキョロと周囲を見回すと、数センチ開いた窓の隙間から、にゆるりと植物の根っこが店の中に入り込んでいる。根っこが箒^{ほうき}に巻きついて、こちらに投げつけられたようだ。

感謝……圧倒的感謝……ッ。いつも私を守ってくれる木の精霊たち。彼らのエールを受け、箒^{ほうき}の柄を力強く握り締める。

「ドリヤアアアッ!」

そして、渾身の力を込めて泥棒へ箒^{ほうき}を振り下ろす!

「ぐふう……っ!」

私の攻撃を受けた泥棒は小さく呻^{うめ}いたあと、動かなくなった。

死……んではないはず。生きてるよね?

顔を隠していた布を剥ぎ取ってみると、泥棒の正体はどこにでもいそうな普通のおじ

さんだった。ちなみにメタボ体型。お金に困ってこんなことをしたのかな……

何はともあれ回し蹴りを泥棒にお見舞いしてくれた人物と木の精霊たちのおかげで、薬屋に平和が戻った。泥棒退治に協力してくれたお礼を言わなくてはと私はその人へ視線を向けた。

「ありがとうございま……」

おやおや? フードを被り、スカーフで口元を隠している。さらなる不審者……!?

「ま、待って。私は怪しい者じゃないわ」

思わずファイティングポーズを取ると、若い女の人の声がスカーフの下から聞こえてきた。

「予定よりも早くこのヘルバ村に着いちゃって。薬屋が聞く時間まで散歩でもしてようと店のそばを通りかかったら、口論しているような声が聞こえてきたの。ひよっとしたら、何か事件に巻き込まれたんじゃないかと思ってお邪魔したのよ」

村の外から来て、薬屋が開くのを待っていた? ん? それじゃあ、この人はもしかして……と思っていると、店の奥からバタバタと大きな足音が聞こえてきた。

「おのれ曲者^{くせもの}お! レイフェルさんから離れろお!!」

両手にフライパンとモップを装備し、恐ろしい形相を浮かべたティアが店内に姿を現

した。

「お、落ちていてティア。もう泥棒ならやつつたから。ほら、このおじさん！」

私は気絶しているおじさんを指差した。

「へ？　じゃあ、この怪しそうな人は誰なんですか？」

「私は――」

女性の言葉を遮るように、店のドアを叩く音がした。村人の誰かが様子を見て来くれたのかな？

「すみません、朝からうるさくしちゃって……」

「朝早くにすまん、ここはヘルバ村の薬屋だろうか？」

ドアの向こうに立っていたのは、厳^いつい顔をした兵士だった。しかもその後ろにもたくさんいる。

え？　うちの店、何かやらかしちゃった!?　税金はこないだちゃんと支払ったはず……!

「ああ、そんな不安そうな顔をしないでくれ。お嬢さん方を捕まえに来たわけじゃないんだ」

困ったように笑いながら兵士が私に言う。

「人捜しをしているんだ。四十代くらいの……んん!?」

気絶しているおじさんに気づいた兵士が、店の中を覗き込む。

そうだ。やつつたはいいけれど、そのあとのことを考えていなかった。せっかくだし、連れていってもええないかな……

「あっ」

泥棒おじさんの顔をまじまじと見ていたひとりの兵士が声を上げた。

「いた！　やっと見つけたぞ、あの野郎！」

その叫び声に、仲間の兵士たちが安堵^{あんど}の表情を見せる。

泥棒おじさんのことを捜していたって……この人は一体何者なの？

そんなことを考えていると、表情から私の疑問を察したのか兵士のひとりが泥棒おじさんの正体を教えてくれた。

「あの男は先日兵舎から脱走した元兵士だ」

「えっ!？」

あの中年腹で兵士はやや無理があるのでは？

「つい最近入隊したばかりの奴だったんだが、訓練の厳しさにすぐに音を上げてしまった。しかも脱走しただけならまだしも、兵士長の部屋に忍び込んで金を奪って消えた

んだ」

「ええ……？」

脱走ついでに盗難事件をやらかしたんかい……

「当然兵士長は激怒してな。なんとしてでも捕まえろって命令が下されたんだ。他国に逃亡する可能性が高いし、国境付近の村に潜伏しているんじゃないかと思ったんだが、予想が的中してよかったよ。……おい、こいつを店から連れ出せ！」

「はっ！」

仲間の兵士たちが店内に入り、泥棒おじさんの足首を掴んで外へずると引つ張り出していく。

何はともあれ、これで本当に平和が戻った。

安堵で胸を撫で下ろしたところで、兵士たちの目の下に青黒いクマができていることに気づく。顔色もあんまりよろしくない。

「あの……皆さん、かなりお疲れではないですか？」

「……そうなんだよ。ただでさえ人捜しで忙しいってのに、さらに脱走した馬鹿まで捜し出せって命じられるんだもん。もうくたくただよ」

心配になって聞いてみると、兵士は力なく笑いながら答えた。

「あつ、そうだ。一応葉屋さんにも聞いておくか。……このくらいまで黒髪を伸ばした、紫色の瞳の少女を捜しているんだ。ここ半年くらいで、そんな人物がこの店を訪れたことはないか？」

自分の胸辺りに手を当てながら、兵士さんは私にそう質問した。

「うーん……そんな人は見たことないですね。多分来ていないと思います」

私は記憶を遡ってみたものの、当てはまる人物は思い浮かばなかった。

「そうか。いやまあ、こんな村にいるわけがないと思ったんだがな」

「その女の子、どうしたんですか？」

「んー……まあ、ちょっとな」

兵士は苦笑しながら話を続ける。

「正式に捜索依頼が出たわけじゃないんだ。ただ、もし彼女を見つけることができれば、もしかしたら謝礼金をたんまり貰えるんじゃないかって、うちのお偉いさん方が……いや、今の話は聞かなかったことにしてくれ」

「はあ……」

謝礼金の話が挙がるくらいだから、その子は偉い人の家族なのかな。

「では朝早くに失礼……ちょっと待て。そこにいるのは女か？」

店から立ち去ろうとしていた兵士が動きを止める。その視線の先にいたのは、例の顔を隠した人物だった。

「念のためにフードとスカーフを外してもらってもいいだろうか」

「ええ、……これでいいかしら？」

兵士にじつと見つめられながら、女性は躊躇ためらいもなくフードとスカーフを外し始めた。フードの下に隠されていたのは、短く切り揃そろえた黒髪。初夏を思わせる柔らかな若葉色の瞳。どこか冷たい印象を受けるのは、鋭い目つきのせいなのかもしれない。

兵士が捜している紫色の瞳の少女ではないみたい。

「……ああ。協力感謝する。では今度こそ帰るよ。あの脱走兵も捕まったことだし、これで少しは仕事も楽になる」

兵士の顔には落胆の色が浮かんでいた。

「あ、ちょっと待っててください」

帰ろうとするのを引き留めて、飴の入った瓶を兵士さんにプレゼント。

「疲労回復の効果がある飴です。数種類の薬草のエキスを混ぜているからちょっと苦めなんですけど、もしよかったらぜひ」

「おお、ありがとう。あとで舐めさせてもらおうよ」

そうお礼を言って帰っていく兵士さんたち。

店の中に戻ると、真つ青な顔をしたティアが女の人に何度も頭を下げていた。

「さっ、先ほどは大変失礼しましたあ……！」

「そんなに謝らないで。そもそもは誤解を招くような格好をしていた私が悪いんだから」

女の人はそう言って、あっけらかんと笑ってみせた。曲者くせもの呼ばわりされたのに……なんていい人なんだろう。

さて、今日うちの店を訪れる予定の旅商人は確か……

「あなたはダチュラさん……でよろしいでしょうか？」

「あなたがレイフェルさんね？ あなたの噂はかねがね聞いているわ」

「は、はい」

この店を訪れる商人の中には、私が薬神様の創造の加護を持つ薬師だと知っている人もいる。正直に言くと、そういう理由で褒められたり、期待されたりするのはちょっと苦手なんです……

おっと。いけない、いけない！ 今はダチュラさんとの商談に集中しないと！

首をぶんぶんと横に振って気持ちを入れ替えていると、ダチュラさんが窓に視線を向

けながら口を開く。

「それじゃあ私はお店が開く時間まで、もう少し外を散歩しているわね」

「あ、待ってください！ 少しでもお時間をいただければ、奥の部屋にご案内できますので！」

「……いいの？」

「はい。助けていただいたお礼も兼ねて、美味しいお菓子とお茶もご用意いたします」
私は笑顔で答えた。

各地を転々としていて一ヶ所に留まることのない旅商人。自由気ままな職業だと思われがちだけれど、実際はとても厳しい業界だし忙しいみたい。だから少しでも、商談の時間を早めて送り出してあげたほうがダチュラさんも助かるんじゃないかな。

そんなことを思いながら奥の部屋を急いで片付けて、ダチュラさんをお招きしたのだった。

「この焼き菓子、オレンジの皮が入っているのね。ただ甘いだけじゃなくてほろ苦さもあって、いい塩梅あんばいになっているわ」

ティア特製のオレンジマフィンマフィンは、ダチュラさんのお口に合ったみたい。ティアの作

るお菓子は、そりゃ美味おいしいもん！ 美味おいしそうに食べ進める姿を見て私までうれしくなっちゃう。

それにしてもダチュラさん、とっても上品に食べるなあ。まるで食事作法のお手本を見ているみたい。なんかこう……大人の女性！ って感じがする。

「ごちそうさま。お菓子もお茶も美味おいしかったわ」

そしてダチュラさんが食べ終わったところで、いよいよ商談開始。

「まずは、この店で取り扱っている品物の一覧を見せてもらえろ？」

「はい。ご用意してあります」

昨日のうちに作っておいた、薬の効き目とか値段を簡単にまとめたリストをダチュラさんに渡す。

真剣な眼差まなざしでそれに目を通すダチュラさん。けれど、次第に硬い表情を浮かべ始める。

な、なんだろう、この不穏な雰囲気。

「これは……」

ダチュラさんがぼつりと呟つぶやきを零こぼす。

「な、何か問題でもありましたか？」

私は恐る恐るダチュラさんに尋ねてみる。

「問題というより……この店では、普段からこの価格で薬を販売しているの?」

高いと思われた!? 都会の薬屋よりも安い値段で販売しているつもりなんだけど……

「で、でも、たまーに特売でもう少し安くするときもあります」

「これよりもさらに安く?」

「おや? この反応は……」

「他の薬屋もそうだけれど、この国は安価で医療品が販売されているのね」

「あー確かにそうかもしれませんね」

うちの国って、薬を結構簡単に手に入れられるほうなんじゃないかな。

だけど、その逆の国も多いんだよね。それこそ風邪薬が贅沢品みたいな扱いになっているって聞いたこともあるし。

そう思っていると、ティアが思い出したように口を開いた。

「確かりーディンって国だと、薬がすごく高いんですけど。前に新聞でそんな記事を読んだことがあります」

そうそう。薬高すぎ問題で真っ先に名前が挙がるのが、あの国なんだよね。

人口も多くて経済もある程度発展している国。それなのに生活必需品であるはずの薬

が、贅沢品ぜいたくひんのような扱いになっている。家計が苦しい家庭は、薬を買うのも一苦労なんだって。どうしてそんなことになっているのかと言うと……

「原因はりーディン薬師協会よ。彼らは自分たちの利益のために、医薬品をわざと高額に設定しているらしいの」

どこか呆れた様子でダチュラさんがそう言い放った。

そもそも薬師協会で販売を認めている医薬品の売上は、その一部が協会に流れる仕組みになっている。つまり高めの価格設定にすれば、より協会の懐なつこが潤うってこと。

「しかも、そのことを知っていながら王族や貴族は見て見ぬふり。あの人たちにはりーディン薬師協会の割引制度が適用されているのよ」

「ええ? 普通そういう制度って平民が対象ですよね? お金をいっぱい持っている人たちが薬を安く買えて、貧しい人たちが買えないってなんだかおかしくないですか?」

ティアが怪訝な顔で尋ねる。

「協会の奴らが言うには、上級国民の特権ってことらしいわよ」

特別扱いしているんだから、協会のやり方に口出しするなっってことかな。自分たちが困らないなら、庶民の暮らしなんてどうでもいいっていう考えを持つ王族や貴族は多いからね。

それにしても汚い。やり口が汚いぞ、リーデイン薬師協会。

「そんなのあり得ない！ 金の亡者協会に改名したほうがいいんじゃないですか!」

私もティアの意見に賛成だ。うんうんと頷^{うなず}いていると、ダチュラさんが溜め息交じりに言う。

「上の人間があなたたちみたいな考えを持てば、あの国は変われるのかもしれないわね……。いえ、話が脱線しすぎたわ。そろそろ商売の話に戻りましょうか。今回あなたの店から仕入れる品物なんだけど……」

「は、はい」

ダチュラさんの言葉にビシッと背筋を伸ばす。旅商人の中には『やつぱり他の薬師のところに行きます』と、何も仕入れずに帰ってしまう人もいるのだ。

「この店にある薬を全種類、それも可能な限りたくさん貰^{もら}えないかしら?」

「えっ!」

そ、そんなに買ってくれるんですか!?

豪快な注文にびっくりしていると、ダチュラさんは申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

「ごめんなさい。流石^{さすが}に急にそんな話されても無理よね」

「ああつ、違うんです、謝らないでください！ うちとしても、たくさん買ってください

るのはありがたい話なんですけれど、すごい量になっちゃいませんか?」

「村の外に馬車を停めてて、そこに積むから大丈夫よ」

それは分かるんだけど、旅商人の売り物としてはやけに医薬品の比率だけ高くなっちゃうような。

でもダチュラさん本人が大丈夫って言っているしなあ。あんまり深く考えないでおこう……と結論づけていると。

「それと、もうひとつお願いがあつて……いいえ、こちらが本題ね」

ダチュラさんは真剣な表情でそう言つて、両肘を机に立てて手を組み合わせる。

「な、なんでしょう?」

「レイフェルさん、その腕を見込んであなたに作ってほしい薬があるの」

「えっと……それはこの店に置いていない薬ということでしょうか? そういう依頼はたまに受けることがあります……」

するとダチュラさんは、少しだけ間を置いてから私の質問に答えた。

「今から数年前、ある少女が病気に罹^{かか}ったわ。幸いなことに彼女の家は薬を買う余裕があつたから、すぐに完治すると言われていたの。……だけど処方された薬に重大な問題があつたみたい。その薬を飲んだ彼女は、激しい中毒症状に襲われたわ。一命は取り留

めたけど、今も頭痛や熱、倦怠感が残っていて日常生活を送ることも難しい状態なの」
 ダチュラさんの話を聞いて、背筋がゾクツと冷たくなった。

薬師にとって一番怖いのは、調合ミスした薬を患者に飲ませちゃうことなんだよね。最悪の場合、患者が亡くなってしまいうこともあるし。

「えっと、それじゃあ私に作ってほしい薬というのは……」

「ええ。彼女を救う治療薬よ」

……そうきましたか。そこまで重い症状の後遺症を治す薬。私にそんなものが作れるだろうか。すぐに答えが出せなくて悩む私を見て、ダチュラさんが静かな声で言う。

「報酬ならいくらでも支払うわ。たとえ望む結果にならなかったとしても」

「もしかして……その患者さんってダチュラさんの大切な人なんですか？」

私は恐る恐る聞いてみた。淡々と話しているダチュラさんだけど、どこか必死さを感じる。

「……私の大事な友人よ」

ダチュラさんは、ぎこちなく微笑みながら答えてくれた。

「彼女がこのまま一生治らないかもしれないって途方に暮れていたときに、加護を授かった薬師の噂を私は耳にしたの。どんな薬も作ることができて、どんな患者も治すこ

とができる。だからひょっとして、その薬師なら彼女を救ってくれるかもしれないと思ったのよ」

うーん、どんな薬でも、どんな患者もというのはちょっと大げさだと思う。薬神様の加護の力にも限度があつて、作りたくても作れない薬だつてたくさんある。

でもそんなこと、私を頼ってくれるダチュラさんには言えない。それに薬師として、困っている人を放^{はな}つてはおけないよね。

やるぞ、私は！ 私の薬師魂に真っ赤な火がついた！

「ダチュラさん、私にご友人の治療薬を作らせてください！」

「……ありがとう、レイフェルさん」

私の言葉を聞いて緊張の糸が解れたのか、ダチュラさんが安堵^{あんど}の笑みを浮かべる。それを見て、俄然やる気が出てきた。

「まずはご友人にお会いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「もちろん。彼女ならサマル村の診療所に預かってもらっているわ」

サマル村。名前だけなら聞いたことがある。このヘルバ村からだったら、一日半もあれば着く距離じゃないかな。案外近場で助かったなあ。

……うん？ ちょっと待てよ。『預かってもらっている』って元々は別の場所にい

たつてこと？

そんな疑問を浮かべながら、ダチュラさんのお友達に会うための打ち合わせを始める。ダチュラさんは、お友達をヘルバ村へ連れてこようかと考えているみたい。だけど、病人に長時間の移動はあまりさせたくない。

そうして話し合いの結果、私は数日後にサマル村へ行くことになった。

「何から何まで悪いわね、レイフェルさん」

ダチュラさんは店を出る前に、またフードとスカーフで顔を隠していた。

あんなに綺麗な顔をしているのに勿体ない。けど肌が弱くて、日光をずっと浴びているとすぐに赤くなっちゃうらしい。

「いいえ、これくらいさせてください。私の店でこんなにたくさん仕入れてくれたんですから！」

店をティアに任せて、私はダチュラさんのお手伝い。村の外に停めている馬車に医薬品を次々と積んでいく。

ちなみに馬車を引く馬のメルバちゃんは、つぶらな瞳がチャームिंगな栗毛の女の子。ダチュラさんに顔を撫でられると、うれしそうに目を細めて喜んでいた。可愛いなあ。

「仕入れ、ね……」

「ダチュラさん？」

「あのね、私本当は商人じゃないの」

ダチュラさんは、消毒液の入った箱を馬車に積みながらそう打ち明けた。

「女ひとりで旅をしていると、何か理由があるのか根掘り葉掘り聞こうとする人がいるのよ。だけど商人ってことにしておけば、それだけでとりあえずは納得してくれる場合が多いの」

「そ、それじゃあ、旅商人のふりをするために薬を買っているんですか？」

それにしても買すぎでは？

私の質問に、ダチュラさんは首を横に振った。

「いいえ、それだけが理由じゃないわ。サマル村の診療所で友人を預かってもらう代わりに、医薬品を提供しているの。あの村には薬師がないから、今までは旅商人から買っていたんですって」

私がやってくる前のヘルバ村と同じだ。薬師がない地域って意外と多いのかも。

「でも、一度にこれだけたくさん買ったのはこれが初めてよ。なんたって天才薬師が作る薬だもの」

いいえ、天才薬師だなんてそんな。世の中には、私よりもすごい薬師が……あ、そうだった。

「ダチュラさん、あの建物のことはご存じですか？」

私が指差したのは、森の近くにそびえ立つ煉瓦造りの立派な建物だった。

「いいえ。貴族が建てた別荘だと思っていたけど……」

ダチュラさんは不思議そうに首をかしげながら答える。

「蛇の集いつていうアスクラン薬師協会があるんですけど、その支部なんです」

敷地内には薬草園もあって百種類以上の薬草が栽培されている。

その中には、独特のにおいがする種類もチラホラ。だから園内は、色んなにおいが混ざり合う魔の空間だ。

以前ティアとふたりで入らせてもらったことがあるけれど、ものの数分もしないうちに脱出した。死ぬかと思った……。

「そうだったのね。この国にも支部が作られたのは知っていたけれど……」

ダチュラさんは興味津々な様子で、支部を眺めていた。

「もしお時間に余裕があれば、あちらにも足を運んでみるといいですよ。お客様向けの販売所もあって、色んな薬がずらーっと並んでいるのを見ているだけで楽しいんです！」

私が声を弾ませて話すと、ダチュラさんは「楽しい？」と不思議そうに言葉を零した。^{こぼ}

その反応を見てハッと息を呑む。普通の人は、薬を眺めても楽しくないか……！

変な薬師だと思われてしまったかもと不安に思っていた私だけれど、ダチュラさんはクスクスと小さな笑い声を漏らした。

「レイフェルさんにそう言われると、なんだか私も気になってきたわね。今度行ってみようかしら」

「ぜ、ぜひぜひ！ なんと、あの薬学王子アレックスさんが開発した薬もあります！」

ダチュラさんの言葉にほっとしつつ、さりげなくアルさんの名前を出してみる。……させてください、恋人自慢。

蛇の集いを知っているなら、もちろん薬学王子も知っているはず。

「アレックスって、もしかして……アスクラン王国の第三王子のこと？」

「はい。支部長を務めているんですよ！」

「あら、すごいじゃない。だけど王族の仕事もあるだろうし、とっても忙しそうね」

そうなんです。現在進行形で大忙しなんです。アスクラン王国の式典の準備で。アルさんに会えない寂しさが込み上げてきて、思わず溜め息をついたときだった。

「レイフェルさああんっ！ これ忘れてますよおおおっ！！」

紙袋を抱えたティアがこちら目がけて猛ダッシュしてきた。
チュンチュンッ！

馬車の周りで地面をつついていた雀たちが、ティアの絶叫に驚いて一斉に飛び立つ。
「ティア!？」

「こ、これだけ残っているのを見つけたから……届けに来たんですう……ゲホッ、ゴホッ」

店からここまで全力疾走してきたのだろう。ゼエゼエと息を切らしながら、私に紙袋を渡してきた。

慌てて紙袋の中を見てみると、鼻炎用の薬がたくさん入っている。あ、これ準備だけしておいて、置いてきちゃったんだ……

「あ、ありがとうティア……」

こんな無理をさせてしまっただけで申し訳なくなりティアの背中を撫でる。すると、ダチュラさんが私たちを見て目を細めていた。

「あなたたちって師弟というより仲良しな姉妹みたいね」

「あ、それよく言われるんですよ！ ね、ティア」

「はい！ 私も最初レイフェルさんを見たとき、びっくりしましたもん」

その原因で私と間違われて、誘拐される大事件が起こったことがあります……

「それじゃあ、私はこれで失礼するわね」

「はい！ お気をつけて」

「ええ、さようならレイフェルさん、ティアさん」

ダチュラさんはそう別れを告げると、軽やかな動きで馬車の御者席ぎよしやせきに乗った。そして、ダチュラさんに指示されてメルバが颯爽さつそうと走り出す。

か、かっこいい……！ いつか私もあんなふうに馬車を走らせてみたいな～！

そんなことを思いながらティアと一緒に、ダチュラさんの背中を見送った。

ダチュラさんが私を迎えにやってくるのは、三日後。

私がいけない間、店はティアに任せる予定だ。もしティアが大変そうだったら、手伝ってあげてくださいと村長たちにもあとでお願いしておこう。

店の営業はなんとかなるとして、それまでにやっておかなければならないことがある。そう。それは薬作り。ダチュラさんにたくさん薬を売って在庫が少なくなったから、この三日間で、できる限り補充しておかなくちゃいけない。

そうして、ティアと怒涛の薬作りのために急いで店へ帰ったのだった。

「ハア……ハア……」

ずっと鍋を掻き回しているせいで、腕が痛くなってきた。こういうとき、薬作りって体力仕事なんだって再認識する。

「ハルバートさんみたいな筋肉がほしいね……」

「ほしいですね……」

剣士らしくがっしりとした体格のハルバートさんなら、無限に鍋を掻き回せそう。

アルさんも『薬を作るときだけ、ハルバート様と体が入れ替わらないかなって考えるときがあります』って真剣な顔で言っていた。

だけど、そうしたらその間アルさんの体にハルバートさんが入るのだろうか。

ワイルドな笑みを見せるアルさんと、ニコニコ笑顔のハルバートさん。

……うーん。微妙な気持ちになっていると、ティアにレードルをひょいっと取り上げられてしまった。

「明日出発なんですから、レイフェルさんはそろそろ休んでください。肩を痛めた状態でダチュラさんと旅することになっちゃいますよ」

そう。明日の午前中にダチュラさんが迎えに来る。薬作りに明け暮れているうちに、あつという間に時間が流れてしまったのだ。

「ありがとう、ティア。旅は途中で何が起こるか分からないから、体調はしっかり整えていかないとね」

「そうですよ。ほらほら。アルさんからのお手紙を読んでください」

「う、うん」

今朝届いたアルさんからの手紙。寝る前に読もうと思っていたんだよね。

封筒を開けると、いつものように甘くて優しい花の香りが鼻腔をくすぐる。その香りに心が癒^いされて口元が緩んだ。

手紙には式典が無事に終わったことが綴^{つづ}られていた。

王子たちによる今年のスピーチは、荘厳さが感じられる素晴らしい内容だったと、高く評価されたみたい。アルさんの苦勞が報われてよかった。

お兄さんたちからは来年も……という空気を出されたけれど、しっかりとお断りさせていたのだとか。

アルさんってほんわかしていて流されやすそうに見えて、実は芯の強い人だもんね。彼らには弟の手を借りずに、全力を尽くしていい文章を考えてもらいたい。

そしてこの手紙を書き終えたら、すぐにでもハルバートさんを連れてアスクラン王国を出発するって書いてあるんだけど、ここで問題がひとつ。

「あ、明日かあ……」

アルさんたちが村に着くのは、明日のお昼ごろになってしまいうらしい。

そして私は、お昼前に村を出発しちゃうわけで……ヌアアアッ！

——久しぶりに一緒に夕食でもいかがですか？

そんな文章を見て、申し訳なさでいたたまれない気持ちになる。薬作りで忙しかったとはいえ、少しの間、ヘルバ村を離れることを伝えていなかったのだ。

アルさん、ごめんなさい……！

ちゃんと手紙で知らせておけばよかったと、ものすごく後悔している。はあ……

アルさんのしょぼりした姿が目につく。その姿には、なぜか犬の垂れた耳が頭に生えていた。

第二話 いざサマル村へ

翌朝、私は鏡に映る自分の姿を真剣な表情で見つめていた。

赤からオレンジ色へとグラデーションのかかった、朝焼けの空を彷彿とさせるロープ。胸には大海原の青を閉じ込めたようなサファイアのペンダント。

どちらも私に似合っている……よね？ うん、寝癖も残っていないしバッチリ！

身だしなみチェックを終えてリビングへ向かうと、ティアがふたり分の朝食を用意していた。出発前の準備で忙しい私のためにわざわざ来てくれたのだ。

「今日の朝ごはんは、鹿肉のローストサンドイッチとオニオンスープですよー」

「えっ、ほんとに!?」

「レイフェルさんに食べさせたいと思って、村長が昨日鹿をバキュンツと狩ってきたみたいですよー」

猟銃を撃つジェスチャーをしながら、ティアがそう教えてくれる。

玉ねぎの甘いにおいがキッチンに漂っていたからスープを作ってくれているのは気づく

いていたけど、大好物のローストサンドイッチも朝から食べられるなんてうれしい。ありがとう、村長！」

サンドイッチもスープも美味しく完食して、食後のハーブティーで一息つく。ダチュラさんとの待ち合わせに間に合うように、飲み終えたらすぐに出なければいけない。

「ティア、お店のことよろしくね」

「任せてください。アルさんにもちゃんと説明しておきますので」

「お願いします！ アルさん、きつと落ち込むと思うから……」

私はパンツと両手を叩いて、ティアに頭を下げた。

「……落ち込むだけの人じゃないと思うんだけどなあ」

「え？」

「いえいえ。あの人のことなら、あんまり心配しなくても大丈夫じゃないですか？」

そうだといいなあと思いつつ、お店とアルさんのことをティアに託し、私は村の入口へ向かった。

「おう、レイフェルさんおはよう」

その途中で散歩中の村長に声をかけられた。お辞儀をしながら鹿肉のお礼を言うと、うれしそうな笑顔が返ってくる。

「レイフェルさんに喜んでもらえて何よりじゃ。おー、それとな。サマル村に行くんじやる？ 実はその村長はワシの兄なんじゃよ。多分まだ生きていますと思……いや、もう死んだるかのお？」

「ど、どっちですか!? 結構大事なことですよ!？」

「人間いつか朽ち果てるものじゃよ。ワシなんて棺桶に片足突っ込んでるし」

なんか哲学的だなあ……

「まあ長旅は何が起るか分からんからのう。気をつけて行ってくるんじゃぞ」

「はい！」

村長に笑顔で送り出され、いよいよ出発だと自分を鼓舞しながら歩を速めたのだった。

さて、村の入口で待つこと数分。

ポックリポックリと、リズムカルな馬の足音が聞こえてきた。その方向に視線を向けると、一台の馬車がゆっくりとこちらへ近づいてくる。

「ダチュラさん！」

私が馬車に向かって大きく手を振ると、御者はこちらに気がついて、小さく手を振り返した。

「ごめんなさい、待たせてしまったみたいね」

私の横で馬車を停止させると、ダチュラさんはスカーフを少し緩めながら私に謝った。

「いえ、私も今来たばかりです」

「だったらいんだけど……あら、この前と雰囲気が少し違うわね。そのローブを着ているからかしら？ とつても綺麗な色ね。レイフェルさんによく似合っているわ」

ヒヤッハー！ 褒めてもらえた！

「ありがとうございます！ 蛇の集いに入会したときにいただいたローブで、裏地に蛇の刺繍がされているんですよ」

「蛇？ ああ、蛇は薬の神様の使い魔だったかしら？」

「はい。ちなみにこのローブの色は、朝焼けをイメージしたものです」

「凝っているわねえ。私もほしいから、蛇の集いに入れるように頑張ってみようかしら……なんて冗談よ。さあ、早く後ろに乗って」

ダチュラさんに似合うローブかあ。瞳の色と同じ若葉色……とイメージしたけれど、ちょっと違うかな。紺色とか紫色とか、大人っぽい色がぴったりかも。

脳内でダチュラさんファッションショーを開催しつつ、荷台に乗り込む。屋根つきのその中には、クッションとブランケット、それから数日分の水と食料、数冊の分厚い本



が積まれていた。

なんか……秘密基地に來たみたいで、ワクワクする！

そして、ふくよかな体型をした女の人も同乗していた。

「初めまして、ヨランドと申します。普段はダチュラ様のご友人の介抱をしております。ですが、彼女から『私は大丈夫だから、たまにはダチュラについていてあげて』と……。そのためときどきこうして、ダチュラ様のお手伝いしております。レイフェル様のことはお聞きしていました」

「よろしく願います、ヨランドさん」

「こちらこそよろしく願います。……ところでレイフェル様、その背負っているものはなんでしょうか？」

ヨランドさんは不思議そうな表情で、私が背負っているリュックサックに視線を向けた。

「よくぞ聞いてくれました。これはですね——」

ヨランドさんに説明をしながら、限界まで詰め込んだせいでパンパンになったリュックサックを下ろす。ドサツという重みを感じさせる音とともに、荷台の床に振動が伝わる。

……私こんなに重いのをよくここまで持つてくることができたな。

リュックサックの中に入っているのは消毒液、軟膏なんじょうタイプの傷薬、鎮痛剤、包帯、綿絆創膏、湿布などの応急処置セット。風邪薬や胃薬まである。

「ど、どうしてこんなにたくさんご用意されたんですか……？」

「いつ、どんなときに、何があるか分かりませんので！」

突然大きな事故に遭遇してもいいように、備えは万全にしておかな——

「うっ！」

突如私の肩を襲う激痛。肩めっちゃ痛い！ 連日の無理が祟ったか……！

私は腕をクロスさせるように両肩を押さえながら、その場に蹲うすくまった。

「だ、大丈夫ですかレイフェル様!？」

「ヨランドさん、すみません。……肩に湿布を貼るのを手伝ってくれませんか？」

こんな形ではあるが、リュックサックに詰め込んだものが早速役に立った。こうして馬車に揺られながら私たちは目的地へ向かったのだ。

途中で何度か休憩を挟みながら、馬車を走らせること数時間。

今夜泊まる宿屋がある町に到着するころには、空は夕日に照らされて赤く染まっ